

寺院・僧侶からの発信を考える

六条円卓会議とは、内外の有識者の知見を得つつ、「自他共に心豊かに生きる」ことのできる社会の実現（宗制）に、宗門がどのように貢献できるのか具体的に模索するために設立された場です。

本年三月二十九日に開催された第六回六条円卓会議では、「寺院・僧侶からの発信を考える」をテーマに掲げ、議論を行いました。『宗報』二〇一六年十一月十二月号に発表された「10年、20年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像 答申書」において、

「各寺院に對してはもろろんのこと、各寺院に縁のない方々に対して、いかにたつきかけていくのかを考えること」は、宗門だけの問題にとどまらず、伝統仏教のすべての宗派に共通する喫緊の課題である。

と指摘されています。そして、現代において「み教え」を伝えることの困難さは、真宗教団連合が行った「浄土真宗に関する実態把握調査」において、「浄土真宗に縁のある方に対しても十分に伝

わっていない」という現実とあわせて考えなければなりません。こうした現状を背景として、昨年十二月に行われた宗門教学会議では「宗教者はどのような発信をすべきか」を取りあげ議論を行いました。宗門教学会議では、現代社会において「み教え」を伝えていくためにはどのようなことを考慮すべきかなどが、有識者の先生方を中心に議論されました。この議論を受け、本年の「六条円卓会議」では、「寺院・僧侶からの発信を考える」というテーマのもと、現代において「み教え」を伝えるためにどのようなことが可能か、どのようなことを考えなければならぬのか、といった具体的な議論を行いました。

本号では、安芸教区安芸北組龍仙寺住職・武田一真氏と、山陰教区江津組蓮敬寺住職・富金原真慈氏による講義を報告いたします。

開催趣旨

浄土真宗本願寺派総合研究所副所長 藤丸智雄

本年度の六条円卓会議では、「寺院・僧侶からの発信を考える」というテーマで会議を開催させていただきます。このテーマに設定しました理由について、若干の説明をさせていただきます。

二〇一四年、ご門主は「法統継承に際しての消息」にて、次のように述べられています。

「宗門の現況を考えます時、各寺院にご縁のある方々への伝道はもちろんのこと、寺院にご縁のない方々に対して、いかにしたらきかけていくのかを考えることも重要です。本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないでしょう」。

また、『宗報』二〇一六年十一月十二

月号に「10年、20年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像 答申書」が発表されました。その中では、各寺院にご縁のない方々に対して、いかにしたらきかけていくのかを考えることが、伝統仏教のすべての宗派に共通する喫緊の課題であると記載されています。

それから、親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年、真宗教団連合五十周年記念事業としまして、真宗教団連合が「浄土真宗に関する実態把握調査」を行いました。二〇一七年、二〇一八年に、報告書があがっております。その報告書では、本願、念仏、浄土、もしくは悪人あくにん正機しょうき、他力といった言葉だけでなく、その内容も伝わっていないということや、例えば法事や法要に関する寺院や僧侶からの発信についても弱いのではない

かということが指摘されております。

こうした状況を踏まえて、本年の宗門教学会議では、「宗教者はどのような発信をすべきか」というテーマを掲かげて開催させていただきました。会議では、僧侶・寺院からの発信というものが、ほとんど相手側に届いていないのではないかと、それから、僧侶・寺院から発信したとしても、現代社会に生きる人々の求める事柄と対応していない状況があるのではないかということが議論されました。詳しくは『宗報』二〇一九年三月号、四月号の報告をご覧ください。

こうした議論を踏まえ、六条円卓会議では「寺院・僧侶からの発信を考える」をテーマとし、武田先生、富金原先生にご教示を賜りながら、皆様と一緒に考えていきたいと思っております。なにとぞよろしくお願いいたします。

発題 武田一真



一九七三年生まれ。龍谷大学大学院博士課程修了。博士（文学）。現在、浄土真宗本願寺派宗学院研究員、浄土真宗本願寺派安芸教区安芸北組龍仙寺住職。著書に、『親鸞浄土教の特異性——空海密教との対比を通して——』（永田文昌堂、二〇一三）、論文に、『親鸞における「はじめて」「もとより」考』（『行信学報』三〇号、二〇一七）、『獲得名号自然御書』の考察』（『行信学報』三二号、二〇一八）など多数。

浄土真宗のご法義は、どのようにお伝えすべきなのか、どこまで言語表現するか。そのような伝道実践の現場における悩みから私の宗学は始まり、二十余年を経過してまいりました。それにあって、そもそも親鸞聖人は、どのようにご法義を言語表現し、お伝えくださっているのか、親鸞聖人の語り出された文脈に沿いながらお取り次ぎをしていきたいということが根底にあります、とくに言語表現に問題意識をもっております。

そこで今回は、ご法義を言語表現するにあたって大事と思われるポイントを二点、ご紹介させていただきます。一つは、言語の表現能力の限界まで踏み込みながら、お取り次ぎをするということですが、いま、この場、この人に対して、どのようなアプローチが適切なのか、どのような言葉、どのような例話が適切なのか。みずからが絶えずアンテナを張り、言語表現の限界まで踏み込みながらお伝えする。そうでなければ法は伝わらない

でしょう。こう言っておけば間違いない、というような安全圏に自分を置いている言葉では、「伝える」ということは成立しないと思います。浄土真宗のご法話とは、客観的な教義の説明ではありません。ですから、こう言っておけばいいという、いわゆる「間違わないこと」を気をつけただけの説明では、法は伝わらない。私たちは絶えず、言語表現の限界まで踏み込んでいくことが必要だと思っています。

もう一つは、言語表現の限界ラインで踏みどまるということです。そもそも仏教は出世間の法ですから、つねに世俗と勝義という決定的な断絶があります。言葉で全てを伝えることは、そもそもできないわけです。ですから、「今日の話はともわかりやすかった」という反応しか残らなかつたら、そこにはまったく勝義的なものは立ち現れていないということになります。どこかに世俗と勝義の断絶があり、こうとしか言えない、ここから先は言葉にならない。言葉にし

たら全てうそになるという限界ラインがあるということですよ。

例えば、『歎異抄』第二条では、

おのおの十余箇国のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極楽のみちを問ひまかさんがためなり。

〔註釈版〕、八三二頁

とあります。門弟が命がけて関東から親鸞聖人を尋ねてこられ、「弥陀の本願に誓われてあるといいますが、本当にお念仏一つで救われますか」という趣旨の問いを投げかけられたのでしょうか。その問いに対して親鸞聖人は「弥陀の本願まことなれば」と答えられています。これは回答、説明になっていませんね。けれども、「弥陀の本願まこと」ということを、「○○だから、まことなのですよ」と説明したならば、わかる話にはなっても、法が伝わる場そのものが無くなってしまいうでしょう。法が「伝わる」という事態は、世俗の価値観にいるわれわれが、仏

法という異質のものに遭遇することです。それが自分の物差しに合わない言葉だからこそ、仏法によって、私たちは自分自身が問われるわけです。親鸞聖人の言葉も、最終的には、自力のはからいとらわれている限りけつして領きえない、そのような言葉の置き方をされていると言えます。だからこそ、その言葉は、私たちの自力のはからいを問う得るのであり、そこに、一人ひとりが弥陀の本願に遇う場があるのでしよう。

ですから、言語表現の限界ラインまで踏み込むことと、言語表現の限界ラインで踏みとどまるということがあって、はじめ、聞いている人が、自らの物差しとはまったく異なる仏法という物差しに遇うことができる。伝わるという出来事は、そこにこそ成りたつと思います。

最後に、これは広島市の布教使さんが、仰つていたことです。お参りの途中中、ご門徒のおばあちゃんと子育ての話になったそうです。「子どもというの、思いどおりにはなりませんね」とお話しす

ると、そのおばあちゃんは、

「ほうですのう、お寺さん。子どもいうのは、思いどおりになりませぬのう。余計こそかわいいですよのう」

と仰つたそうです。あえて原文のまま、広島弁で紹介いたしました。

自分の子育てにおいて、「思い通りにならない」というのは領けませんが、「だからこそ余計にかわいい」という文脈は、私の中からは、ちょっと出てきません。私からは、出てこない言葉の組み合わせです。けれども、そのような成り立っている世界があり、そのような文脈を実際に生きておられる方が目の前にいらつしやる。そういう当事者の言葉というものが、はじめて、聞く人のこころを問い、生き方を問い、そして一人ひとりを法というものに遭遇させていく。そういうことではないかと思うわけです。

ですから、こう言っておけばいいという安全圏に身を置かず、言語表現の限界ラインまで踏み込んでいくこと。こうと

しか言えないという言語表現の限界ラインを守る。この二つが、ご法義の言語表現においては大事だと考えます。言い換えるならば「弥陀の本願まこと」と

頷きえた当事者として、一人ひとりがその場に立ち続ける、そういうことが、私たち現場の僧侶に求められているということだと思います。

発題 富金原真慈



山陰教区江津組蓮敬寺住職。本願寺派布教使。本堂の隣にカフェを営業。地域の憩いの場として、ニュースなどでも紹介（「ニュースシブ5時」二〇一七年十一月二十六日放送）。カフェでは、「産後ケアのバランスボール」「ワークシヨップ」「坊主バー」などの他、教区主催の「婚活イベント」や「まちづくり会議」の会場提供など、多様な寺院活動を展開している。
蓮敬寺HP <https://www.renkyoujin.net/katudou.html>

まず情報発信ですが、あくまでも私の周りでのことなんですけれども、やはり僧侶の方は、もともと発信しておられるのではないかと思います。掲示板であったり、法座や各種の団体であったり

す。いろんなかたちで、発信は必ずやっています。それはずなんです、それが伝わっていないということ、外に情報が出ていないということ、行動が伴っていないということがあるのではないかなと思

います。

外というのは、自分たちの組織の外です。浄土真宗本願寺派、あるいは私のところで言えば江津組、山陰教区の外ということ。そうした組織を出て、誰かと関わろうということがないと、どうしても身内だけの発信になってしまつて、広がりがなくなつてしまつてということが大きいのではないだろうかと思ひます。

そして、行動が伴っていないということ。これは一つの事例ですが、現在、宗門の重点プロジェクトで「子どもの貧困の克服」ということが目標として掲げられております。鳥根県では、県内に十数カ所、子ども食堂があり、私のお寺でも子ども食堂をやっております。やはり、維持していくのはすごく大変です。ボランティアを確保しなければいけないし、当然お金も要ります。このことは、他の子ども食堂でも同じで、どこでも人材不足、資金不足を抱えながらやっています。ですので、こちらから関わりたいと言え、恐らく「よく来てくださ

いました」と言って迎え入れてくださるはずなんです。けれども、なかなか現場には直接行かないところがあるように思えます。やはり、組織の中に「来てください」というのではなくて、私たちから、そこに向向いていくということをしていかなければ、何も始まらないし、伝わらないというのはあると思います。

このことに関連して、一つのエピソードを紹介します。あるご門徒さんが僧侶の在り方を見て「今だけ、聞くだけ、学ぶだけ」で終わって、実際に行動しないという指摘をされたことがありました。非常に的確で、厳しいご意見だったと思っております。

こうした話をする、どうやって外に出ていいかわからない。どうしたらいいかわからない、という質問を受けることがあります。その時、私はホームページやSNSを活用して、自分の情報発信をしていくことが大事です、とお答えしております。そして、情報を発信するうえで大事なことは、「伝えたいこと

は何か」、「自分は何かできるのか」、「どのような目的で、何がしたいのか」ということを明確にすることです。

それから、効率よく情報を伝えるためには、どうしたらいいかということ、きつちり学ぶということが今後必要になってくると思います。ホームページも、上げたらいけない話ではありません。検索をした際に、どうやったら上位に来るかということなどを意識しながら、ホームページをつくっていかねばならないと思います。

ここで私共の運営しているお寺カフェで気づいたことを少しお話しします。カフェの営業をしていますと、常連さんみたいな方ができてくるんです。それで話をしていると、若い方というのは独自の死後の感覚を持っていると感じています。どういふことかと言ったら、べつに浄土に往生しようがしまいがどうでも良いという考え方です。こういった方たちに、どういふふうにアプローチをすればいいのかということを考える必要が

あると思います。

そして、生き方に迷っておられる方が非常に多いなと思っております。人間関係、あるいは会社、仕事のことで、迷っておられる方がいらっしゃいます。そういった方々が、わざわざお寺のカフェに来て僧侶に相談するということは、やはり僧侶が持つ独自の視点で、自分の悩みに対して、どういふふうに答えてくれるんだらうかというような期待感があるのではないだらうかなと思います。そうした方々に対する発信を今後どうしていくのかということも求められていることなのではないかと思えます。

今回は、武田先生、富金原先生を交えた六条円卓会議全体討議を報告いたします。

(本願寺派総合研究所教団総合研究室)